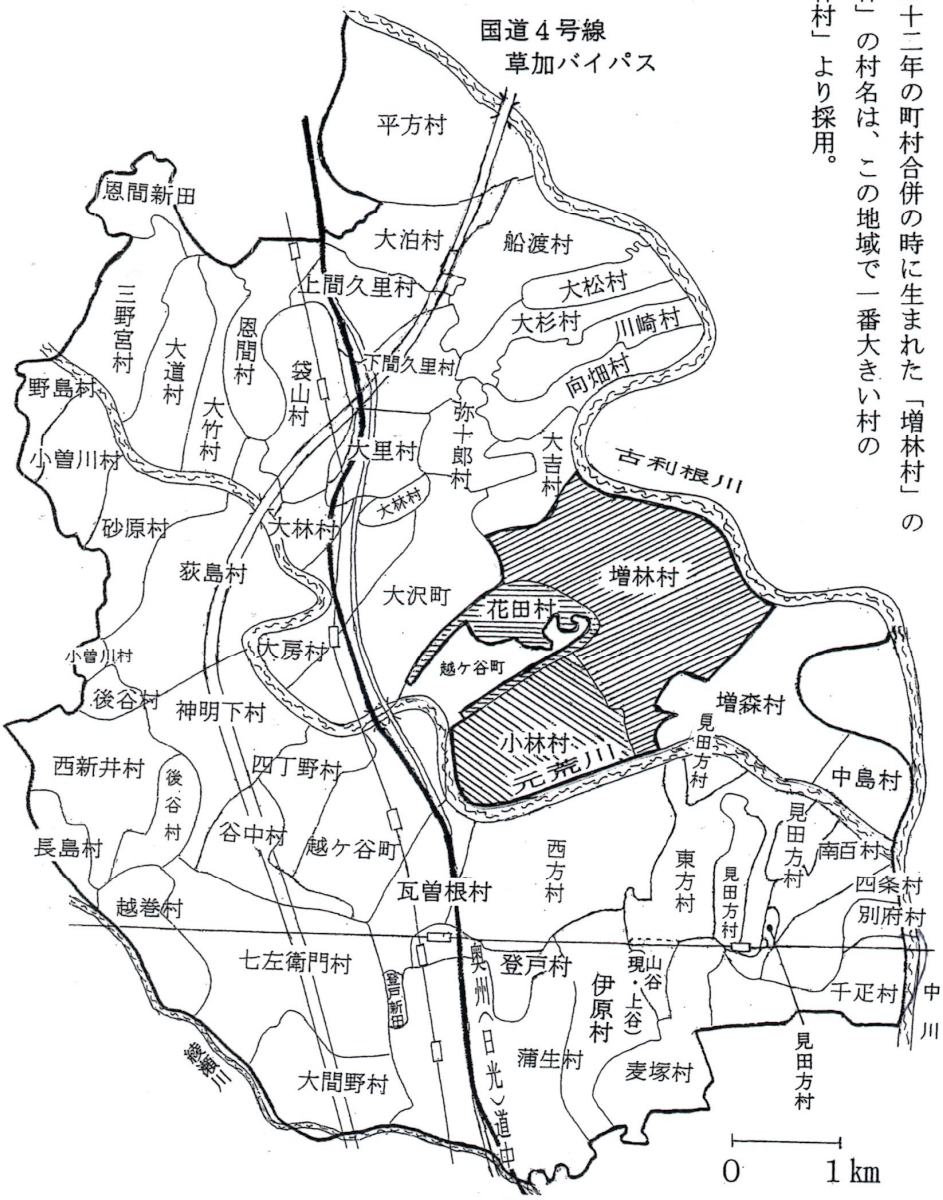
平成１１・１２年度調査

増林地区
石　仏

増林村・増森村・中島村・
花田村・小林村

平成２７年８月改訂

明治二十二年の町村合併の時に生まれた「増林村」の「増林」の村名は、この地域で一番大きい村の「増林村」より採用。



加藤幸一

増森・中島の石仏案内図

増森村

(1)観音堂墓地	No. 1
(2)河原崎の内田稲荷	No. 2
(3)宝 正 院	No. 3～5
(4)中村家[増森1654]	No. 6
(5)小島酒店	No. 7
(6)薬 師 堂	No. 8～14
(7)増森神社	No. 15
(8)中村家[増森2-47]	No. 16・17
(9)増森新田の稲荷社	No. 18～23
(10)増森新田センター	No. 24
(11)吉田家[増森2484]	No. 25
(12)森西川集会所	No. 26~30

中島村

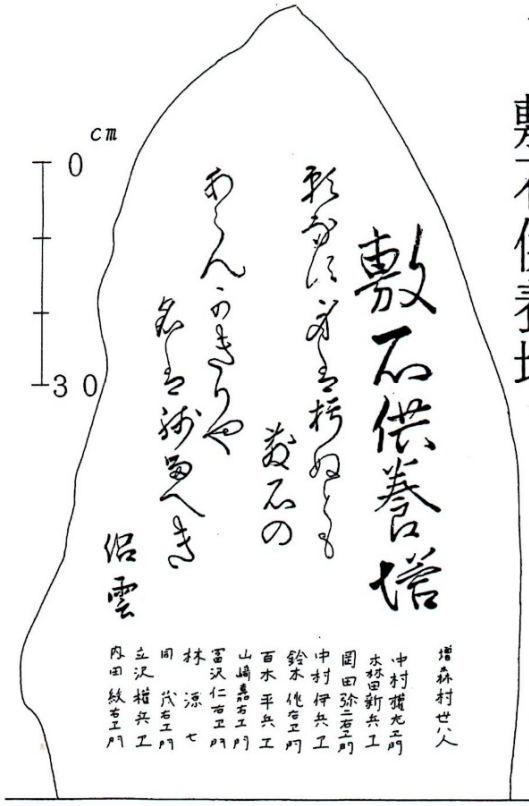
(1)林家[中島1-79]	No. 1
(2)中島神社	No. 2
(3)正福寺管轄の共同墓地	No. 3・4
(4)小川家[中島2-89]	No. 5~7
(5)鈴木家[中島3-66-1]	No. 8
(6)送水管近くの土手道路傍	No. 9・10

追加：中島橋　No.11

平成１２年当時の地図

『荒川橋開通紀念碑』

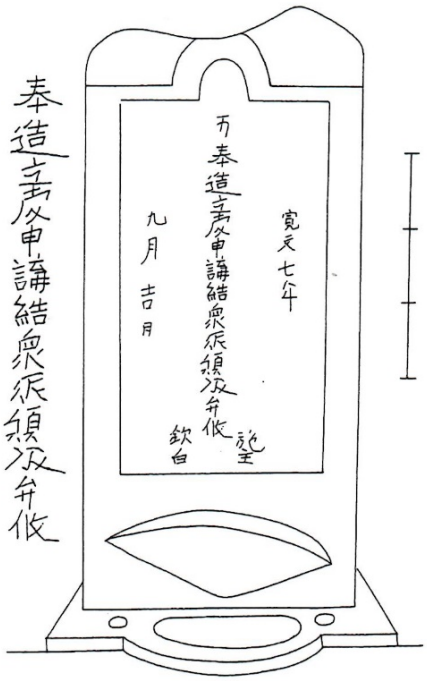
1・増森　敷石供養塔



観音堂墓地

天保１１（１８４０）

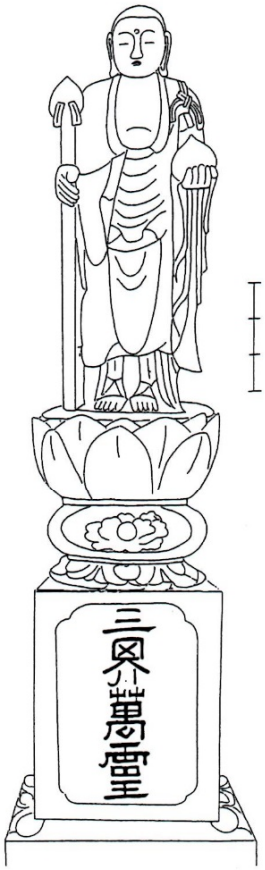
2・増森　板碑型文字庚申塔



河原崎の内田稲荷

寛文７（１６６７）

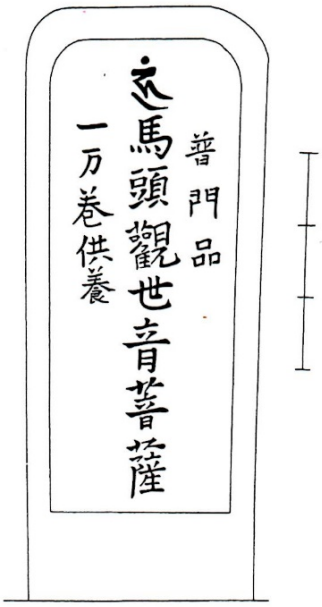
3・増森　『高地蔵尊』石仏



宝正院

宝暦６（１７５６）

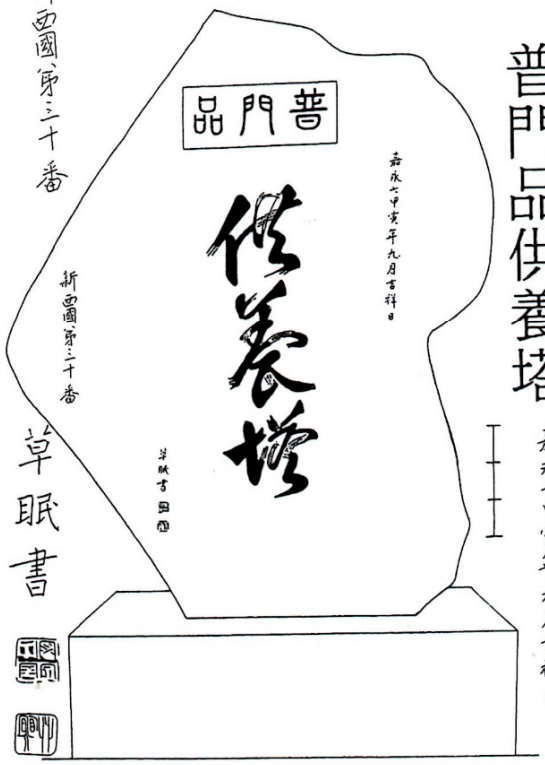
4・増森　「馬頭観音」文字塔



宝正院

延享２（１７４５）

増森5・普門品供養塔



嘉永７（１８５４）

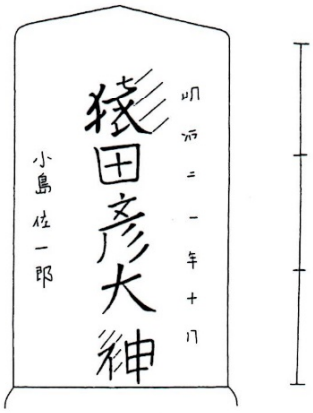
増森6・『大日様』石仏

中村家［増森一六五四］

寛文３（１６６３）

増森7・猿田彦文字庚申塔

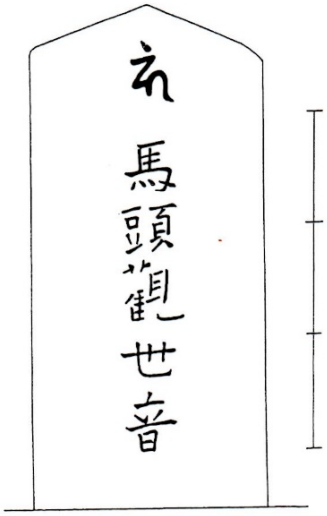
小島酒店



明治年間

増森8・「馬頭観音」文字塔

薬師堂



天保１２（１８４１）

増森9・文字庚申塔

薬師堂

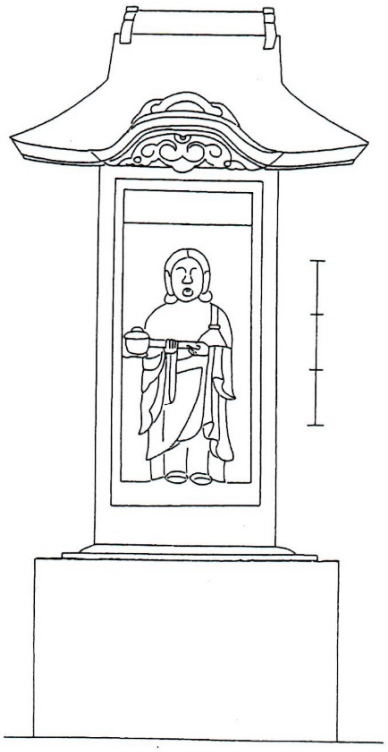
万治2（1659）

増森10・道標付き文字庚申塔

薬師堂

元治元（1864）

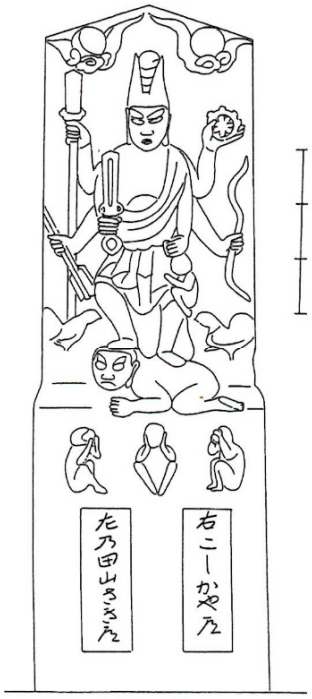
増森11・聖徳太子像



薬師堂

文化4（1807）

増森12・道標付き青面金剛像庚申塔



薬師堂

安永3（1774）

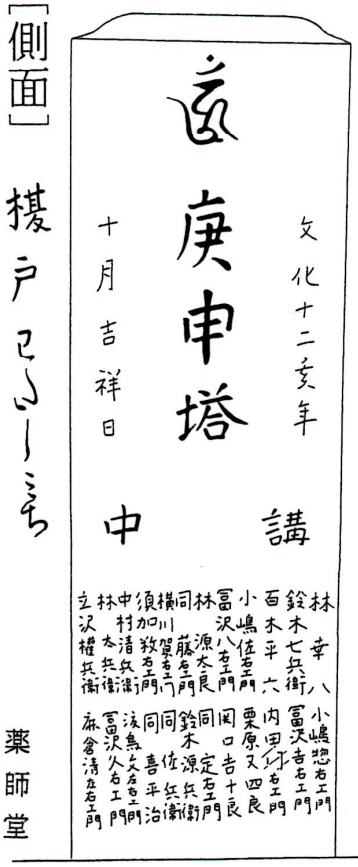
13増森・道標付文字庚申塔

越ヶ谷

[側面] 赤岩

[裏面] 不動

道

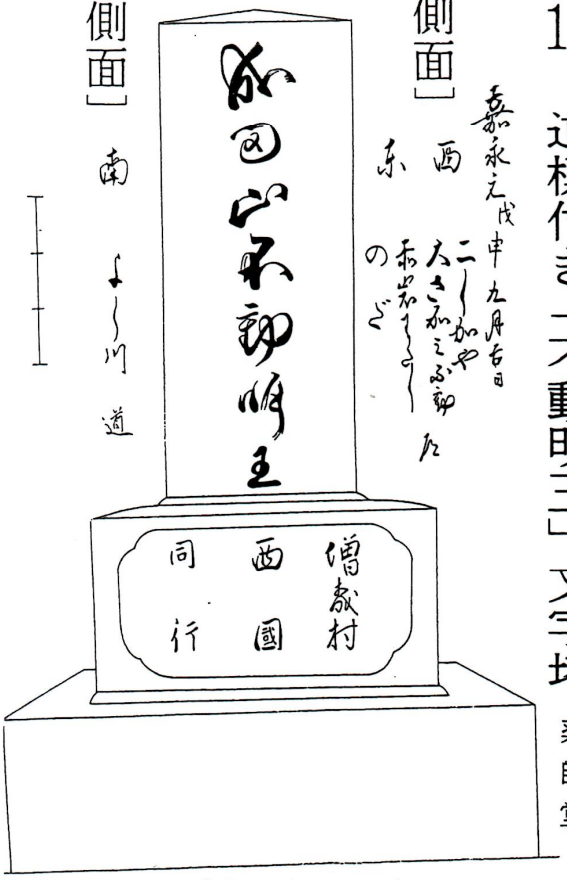


文化１２（１８１５）

14増森・道標付き「不動明王」文字塔

[側面] 西

[側面] 南 吉川道



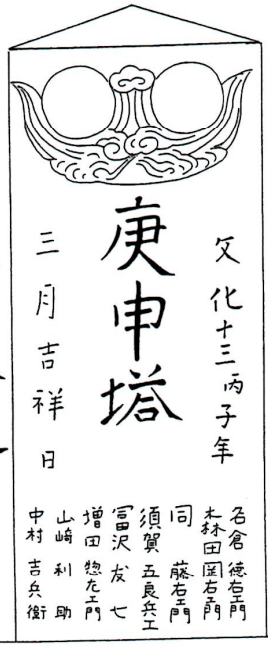
嘉永元（１８４８）

15増森・道標付き文字庚申塔

増森神社

[側面] 南 吉川道

増森村三町講組



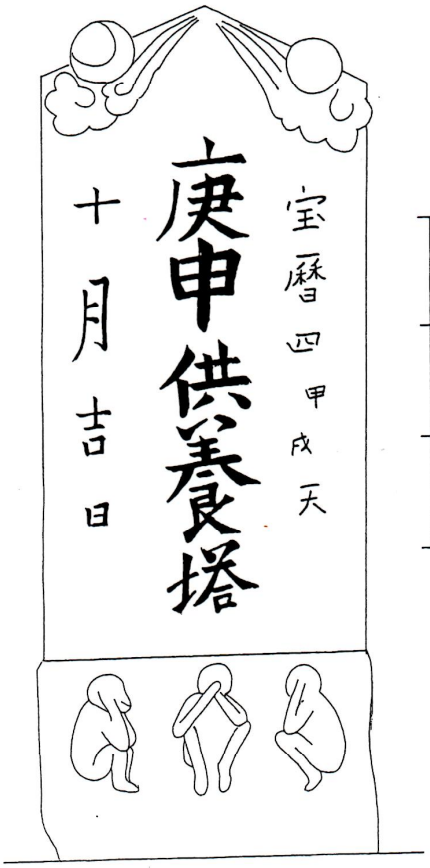
[側面] 北 増林道

[裏面] 北方みちる

文化１３（１８１６）

16増森・文字庚申塔

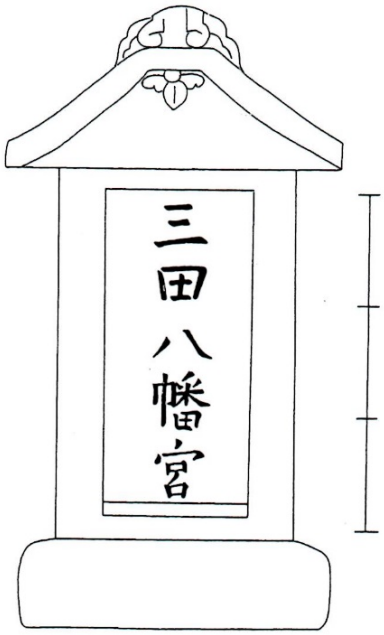
中村家[増森二－四七]



宝暦４（１７５４）

17増森・「三田八幡宮」文字塔

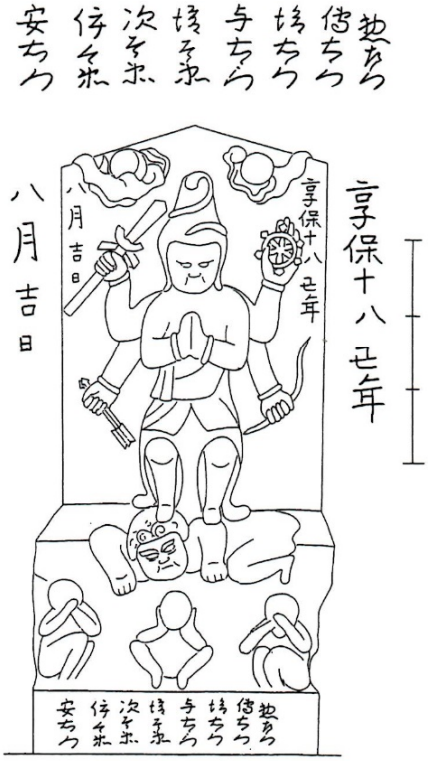
中村家［増森二－四七］



天保１２（１８４１）

18増森・青面金剛像庚申塔

増森新田の稲荷社



享保１８（１７３３）

19増森・青面金剛像庚申塔

増森新田の稲荷社

明和７（１７７０）

20増森・青面金剛像庚申塔

増森新田の稲荷社

21増森・道標付き青面金剛像庚申塔

増森新田の稲荷社

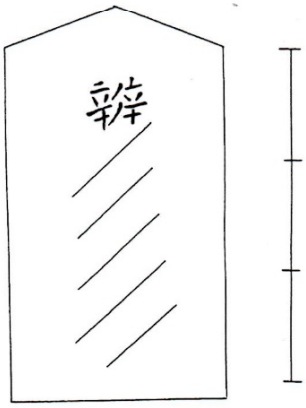
［側面］

右まちたや
左ハ〜かや

寛政１１（１７９９）

22増森・「弁財天」文字塔

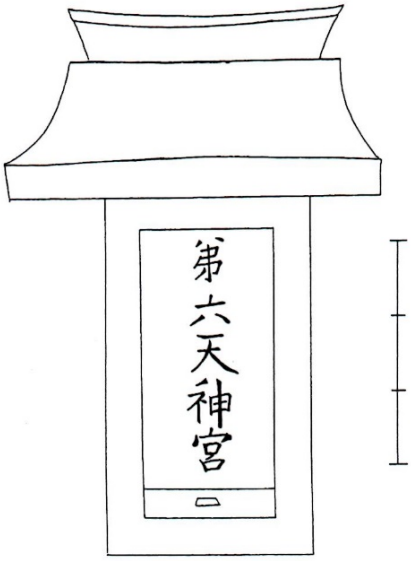
増森新田の稲荷社



天保９（１８３８）

23増森・「第六天」文字塔

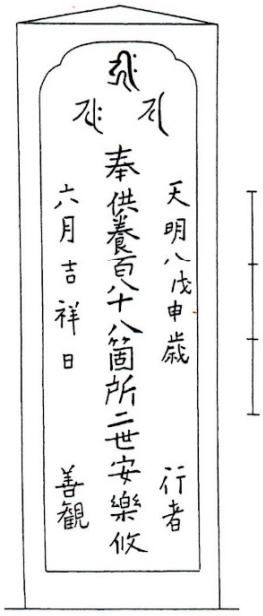
増森新田の稲荷社



宝暦６（１７５６）

24増森・百八十八箇所巡礼塔

増森新田センター



天明８（１７８８）

旧増森村の石仏

（1）観音堂墓地

昔は真言宗寺院の観音寺があった所で、かつては「武蔵三十三箇所」の観音霊場の三〇番に当たっていた。「武蔵三十三箇所」の札所めぐりは、一番の延命寺（吉川市吉川一五四一）から始まり、三三番の東泉寺（吉川市川藤二二〇）で終わり、吉川市、三郷市、葛飾区、八潮市、足立区、川口市、越谷市、松伏町に及んでいた。

最近までこの地に観音堂が建っていたが、平成十年に宝正院に移転され、新しく建て替えられた。

1．敷石供養塔（『越谷市金石資料集』普請三七番）
所　在　地　増森・観音堂墓地
石塔型式　自然石（南向き・高さは中）
年　　号　天保十一年（一八四〇）
［正面］

敷石供養塔　　増森村世八人
中村権左ヱ門
森田新兵ヱ
岡田弥二右ヱ門
中村伊兵ヱ
鈴木作右ヱ門
百木平兵ヱ
山崎嘉右ヱ門
富沢仁右ヱ門
林　源　七
同　茂右ヱ門
立沢権兵ヱ
内田紋右ヱ門

願なす身は朽ぬとも
　　敷石の
あらんかきりや
　　名は残るへき
　　侶雲

［裏面］
天保十一年九月吉日

※参考までに、この石塔を造立した人々の現在の子孫をわかる範囲であげると、次の通りである。

岡田弥二右ヱ門は、増森一二九八の山崎家の東側の地
鈴木　作右ヱ門は、増森一六七六の鈴木家
百木　平兵ヱは、増森一六四四の百木家
富沢　仁右ヱ門は、増森一七三三の富沢家
林　　茂右ヱ門は、増森一七五二の地（現在は理容トヨダ）
内田　紋右ヱ門は、増森一七八六の内田家

※なお、ここにあるはずの『金石資料集』掲載の「真言一一番」「月待六番」の石塔や「越谷ふるさと散歩(下)」掲載の文政元年の「普門品一万五千巻供養塔」の所在が不明である。

《役場跡と馬渡し場跡》

観音堂の西側の道を挟んで反対側にかつては増森村の役場があった。そこでこの道を「役場道」とも呼んだ。この道の突き当たりに古利根川がある。ここに対岸の下赤岩とを結ぶ「馬渡し」と呼ばれた渡し場があった。人の往来の他に馬の運搬も見られたから名付けられた。渡し守は増森一三二七の須賀家が務めていた。

◎「香取宮」標識石塔（『越谷市金石資料集』その他一三番）
平方東京線の県道で増林から増森にはいるとすぐ右に分かれる道路がある。増森村に入る道である。入って百メートル程進むと左手に村で管理している香取宮の小さな祠がある。ここに一見すると力石のようにみえる年代不詳の「香取宮」と刻まれた標識石塔がある。

（2）河原崎の内田稲荷

内田稲荷は増森一四七五の須賀家西側路傍にある。字は河原崎である。

2．板碑型文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所　在　地　増森・須賀製作所（増森一四七五）そば路傍
石塔型式　板碑型（南向き・高さは中）
年　　号　寛文七年（一六六七）
［正面］

寛文七年　　施主
（梵字「キャ」カ）奉造立庚申講結衆□願成弁攸
　　九月吉日　　欽白

◎不詳の石塔
このそばに、この庚申塔と向かい合った祠型の主尊不明の石塔がある。高さ五十センチ位、幅二十五・五センチ、奥行き二十二センチの大きさで、表面は文字が不明であるが、左側面には「元禄十四辛巳　九月九日」と刻まれた年号が読みとれる。

（3）宝正院

江戸時代は東正寺（とうしょうじ）と呼ばれていた。明治四十四年（一九一一）に増林の宝蔵院（現、下組集会所）を合わせ、宝蔵院の宝と東正寺の正をとって現在名の宝正院（ほうしょういん）に改めた。

なお、東正寺はもと東照寺と書いていたが、日光東照宮と恐れ多くも字が一部同じなので江戸幕府によって東正寺と改められたという。

3．『高地蔵尊』石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所 在 地　増森・宝正院の旧参道入口
石塔型式　丸彫り型（南向き・高さは超高）
年　　号　宝暦六年（一七五六）
［左側面］
［台　石］
宝暦第六
龍集丙子
［台　石］
［正面］
（丸彫り地蔵菩薩立像）　二界萬霊
［右側面］
当村念仏
講中欽言

※今でも地元では安産の仏様としての信仰が続いている。高地蔵の名前のいわれは背がとても高い地蔵だからであろう。
※また、ここは以前は宝正院の参道入口であった。

4．「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所 在 地　増森・宝正院
石塔型式　上部隅丸角型（南向き・高さは中）
年　　号　延享二年（一七四五）
［左側面］
延享二乙丑年　講中
鈴木七兵衛
冨沢勘右ヱ門
岡田次左ヱ門
鈴木□次郎
［正面］
普門品
（梵字カン）馬頭観世音菩薩
一万巻供養
［右側面］
九月吉日

※無縁仏の石塔群三群のうちの中央部の群の前から四列目の向かって左から七番目にある。無縁仏の中に埋もれてしまったのは残念である。

◎この近くの林家の墓所に文化元年（一八〇四）の次のように刻まれた笠付きの墓塔がある。
文化元甲子歳
（梵字ア）清寿院殿観心性蓮大尼霊位
三月廿二日

大名につける格式の高い「院殿」が付けられているので、大名に仕えた程の位の高い女性であったのであろう。
『越谷ふるさと散歩（下）』の九十三頁に、「伝えによると増森のある娘がお城にあがり殿様の側室になったといわれ、その人の供養墓石ではないかともいわれるが、詳しいことは不明である。」と紹介されている。

5．普門品供養塔（『越谷市金石資料集』普門品三一番）
所 在 地　増森・宝正院境内（元は観音堂墓地にあった）
石塔型式　自然石（西向き・高さは超高）
年　　号　嘉永七年（一八五四）
［正面］
［台石正面］
當所講中
富沢半兵衛
鈴木源兵衛
林　源太郎
金子源左衛門
富沢仁右衛門
林　太兵衛
同　源七
関口吉十郎
中村幸七
林　藤右衛門
同　茂右衛門
鈴木佐兵衛
須賀武次右衛門
小島武兵衛
大和田仲右衛門
小島善兵衛
嘉永七年九月吉祥日
普門品供養塔

品品

鹿倉四郎右衛門
富沢八右衛門
中村権次郎
小島惣右衛門
鈴木喜平次
同　郡次郎
須賀伊　助
富沢佐兵衛
鈴木平右衛門

草眠書印印

新西国第三十番

［台石　右側面］

世話人
鈴木七兵衛
関口定右衛門

日光道中
越ケ谷宿
石工長兵衛作

（4）中村家（増森一六五四）路傍

6・『大日様』石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・中村家（増森一六五四）路傍
石塔型式　上部丸型（南東向き・高さは中）
年　号　寛文三年（一六六三）
［正面］
文長法師
（大日如来像カ）
寛文三年三月□

※菩薩形をした仏像である。中村家では「大日様」と呼んでいる。印相は、手のひらを上向きにしてすべての指先を上方に向けた両手をへそのあたりで指の背側で合わせている。大日如来が結ぶ法界定印ではないが、法界定印のつもりで刻まれたものであろうか。
また、「文長法師」とは何を意味するのか不明である。
※中村家（増森一六五四）前の旧「古利根川」（現在は工業団地となって、川跡の名残は全くない）の川の中より見つけたものと伝えられている。増森村と川藤村の間には、かつては古利根川が流れていて、増森村は木綿布の晒業が盛んであった。現在の流路に河川改修してからは廃れた。中村栄一氏の曾祖父である作蔵は、農業や晒業を営むかたわら、この古利根川で川魚を捕っていたが、漁の最中にこの石仏が網に引っ掛かったと伝えられている。以後、痰をきってくれる痰の仏様としての信仰が一部で見られたという。

◎「浜子（はまこ）神社」文字塔
所在地　増森・富沢家（増森一六六五）
石塔型式　祠型（南東向き・高さは中）
年　号　明治四十四年（一九一一）
［正面］
濱子神社
［台石］
氏子中
［右側面］
明治四拾四年拾月再建

※中村家の近くの富沢家（増森一六六五）は、東照寺（現、宝正院）の前にあるので地元では屋号を「寺前（てらまえ）」と呼んでいる。この富沢家前の道路に面した祠に濱子明神の石塔が祭られている。この石塔の幅は一八・五センチ、奥行き一八・五センチで、台石を除く屋根の部分も含めた高さは七〇センチである。また、その石塔の下にある二つの台石を含めた総高は八七・五センチである。なお、宝正院の近くには「寺脇（てらわき）」と呼ばれる屋号の家（増森一六七一の富沢家）もある。
「越谷市金石資料集」の「その他十二番」の石塔は、「浜子神社」と「氏子中」と刻まれた祠型（八〇×一五×一五）とされ、年代が不詳、所在地が宝正院裏路傍となっているが、この「その他十二番」の石塔は、ここの富沢家の石塔のことをさすのであろう。

《濱子明神のいわれ》
富沢源七氏（明治三十六年生まれ）からの聞き取り調査（平成十二年八月十七・十八日）によると、浜子明神のいわれは次の通りである。明治の頃、古利根川で漁をしていた富沢沖次郎（おきじろう）氏が偶然に網にかかった木造の神様の像を手に入れた。場所は中村家（増森一六五四）よりさらに上流の東から南に曲流したあたりと思われる。そして近くの畑地に安置した。地元では「明神様」と呼ばれた。増林

村の城ノ上に住む先達を勤めていた戸張氏によって「浜子大明神」と命名された。その後、源七氏が六歳位の頃（明治四十二年頃）に富沢家の敷地に移されたが、この木像は朽ちたので、明治四十四年に木像から現在の石塔にかわった。地元での信仰が盛んで、毎月一日と十五日に宝正院に参拝した帰りに立ち寄ってお参りする者もよく見られた。また、毎年十月二十八日に地元の人々によって持ち回りで講が開かれていた。現在は地元の自治会館（増森本田会館）で十月の最後の日曜日に行われている。

なお、源七氏の祖父は沖次郎氏の養子となっている。つまり沖次郎氏は、源七氏の曾祖父にあたる。

《さんこう渡し（榎戸渡し）》

中村家の少し上流（東方）、現在の丹下製作所のあたりに「さんこう渡し」と呼ばれた渡し場があった。増森側の渡し場は、屋号が「ふなば（船場）」と呼んだ渡し守を勤めた富沢家（増森一五六三、現在はここには山崎家が住んでいる）の前あたりにあり、対岸の降り口が、川藤村榎戸（えのきど）の山崎家（吉川市川藤四四〇－一、屋号は「うしろっぱ・後端」）の裏あたりであった。この渡しは、江戸時代は「榎戸渡し」と呼ばれていたと思われる。なお「さんこう」の語源は、かつて渡し守をした人の呼び名「さん公」からきたのかもしれない。

《せい魚伝説》

なお、増森一七二六の小島専治氏（明治四十三年生まれ、平成十二年六月死去）からの聞き取り調査（平成十二年三月）によると、今はなき古利根川に残る言い伝えや増森本田の繁栄の様子は次の通りである。榎戸の山崎家（川藤四四〇－一、屋号は「うしろっぱ」）の裏の古利根川の榎戸側には、地元では「ふかんぼ」と呼ばれた水深数メートル程の深みがあった。また「深んぼ」から上流百メートル程は「せいケ（が）淵（ふち）」と呼ばれ、せい魚（ぎょ）の伝説がみられる。この淵の主である「せい魚」と呼ばれる巨大な魚が住んでいたが、川が土砂の堆積で浅くなり住みにくくなったので、故郷を捨て東京の隅田川にある鐘ヶ淵に移り住むようになった。ところがこのせい魚が鐘ヶ淵を通る船を転覆させ沈めるようになった。そこで、鐘ヶ淵を通る船は必ず『増森船（ましもりぶね）だよ』と言うことにした。すると「せい魚」は自分の故郷からきた船と思い込み、転覆させることはなく無事に通過することができたという。鐘ヶ淵は綾瀬川が隅田川に注ぐ地点のやや下流にあり、現在の墨田区立鐘淵中学校付近にあった。増森は、東京との交流が盛んであったからこのような伝説が生まれたのであろう。

《増森本田（ましもりほんでん）の敏糸栄》

増森は、大正から昭和の初めにかけては最盛期を迎えていた。松伏の醤油が松伏から東京に運ばれる高瀬船がここを通過した。増森本田では晒し業が盛んであった。馬車で江戸の日本橋方面に運送され、後に『本田（ほんでん）晒業』と書かれた一トン車のトラック二台ほどが、この周辺では初めて使用された。また商人の店も所々にみられていた。こうして一時は「増森東京」とまで呼ばれるようになったのである。

《昭和以降の古利根川》

増森一二九八の山崎高義氏（大正七年生まれ）からの聞き取り調査によると、明治の頃、この山崎家の裏（東側）に増森村の役場があった。役場と観音堂との間を通っている道を「役場道」ともいったという。そしてその頃、山崎高義氏の祖父の弟（山崎寛龍）は勝林寺（勝林寺の本寺である岩槻の福厳寺のことと思われる）の住職であったという。また、かつて増森村の東側を流れていた古利根川について次のように話している。

古利根川には、「馬渡し」（赤岩渡し）や「さんこう渡し」（榎戸渡し）の下流にも渡し場があった。増森神社の南の三百メートル程に屋号が「渡し場」と呼ばれて代々渡し守を務めた須賀家（増森二〇三二）と屋号が「よろず屋（萬屋）」と呼ばれて現在まで商売をしている須賀家（増森二〇三四）がある。この両家の間の細い道に入るとすぐに古利根川の渡し場に突き当たる。これが「せきの渡し」である。

大正十三年頃、現在でいう増森の越谷市工業団地の北端から、中島の送水管のあたりまでを直線に掘って新川が完成すると、増森村の東側を曲流していた古利根川の水量が激減し、流れが穏やかになり、それまでの古利根川の様相が一変した。さんこう渡しの方からこの渡し場手前あたりまで、地元では「なっこぶし」と呼んだ植物が、川面に繁茂したという。その実をとって食べると甘かったという。らい魚も多くいたという。現在はこの古利根川は埋められて昔の名残はない。

（5）小島酒店（増森一七二三－二）路傍

7．猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　増森・小島酒店（増森一七三二－二）路傍

石塔型式　駒型（北西向き・高さは低）

年　　号　明治□□年

［正面］

（明治）

□□□□年十月

猿田彦大神

小島佐一郎

◎この近くの小和田家（増森一七二〇）入口にも高さ四十二センチ程の駒型の猿田彦文字庚申塔がある。正面には「大正二年　猿田彦大神　小和田由蔵」と刻まれている。

（6）薬師堂（慈光庵跡地）

ここは慈光庵の跡地である。ここには県の文化財の二十一仏板碑がある。また、毎年四月八日は薬師様の縁日で地元の人達によって賑わい、毎月二十一日は弘法大師の縁日で、地元の古老（現在は女性のみ）がここに集まり今でも細々と信仰が続いている。

8．「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　駒型（北西向き・高さは低）
年　号　天保十二年（一八四一）
［左側面］
天保十二丑年九月吉日
［正面］
（梵字カン）馬頭観世音
［右側面］
施主　中村きよ
栗原□り
関口きく

9．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』名号五番カ）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　笠付角型（北西向き・高さは高）
年　号　万治二年（一六五九）
［左側面］
□久兵衛
林　又兵衛
和井田茂兵衛
［正面］
万治貳天己
亥　敬
（梵字「サ」カ）奉造立庚申講結衆願成
二月吉祥日
小嶋市右ヱ門
同　内蔵助
□□□□
□□□□
□□□□
□仗
日
小嶋市右ヱ門
同左右ヱ門
森田□右ヱ門
中村□右ヱ門
□沢□□
同　仁右ヱ門
林□右ヱ門
大久保庄兵衛
［右側面］
□田伝左ヱ門
右ヱ門
弥兵衛

※市内には、大成町一丁目の農協裏路傍にある承応二年（一六一五）の庚申塔が一番古く、市の文化財に指定されている。
この万治二年の庚申塔は、承応二年の庚申塔より四十四年後ではあるが、市内有数の古さを誇る初期の庚申塔といえる。

10．道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申三〇六番）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　頭部山状角柱型（北西向き・高さは高）
年　号　元治元年（一八六四）
［左側面］
西こしかや
北ましはやし
道
［正面］
庚申塔
［台石］
小島佐右衛門
中村又左衛門
林　藤右衛門
同　定吉
同　太兵衛
鈴木喜平次
須賀伊　助
立澤権兵衛
富澤八右衛門
小島善兵衛
須賀武次右衛門
鈴木七兵衛
栗原又四郎
山崎嘉右衛門
関口吉十郎
関島平八
富澤仁右衛門
林　源太郎
鈴木平右衛門
小島武兵衛
鈴木源兵衛
中村幸七
林　茂右衛門
黒田嘉兵衛
鹿倉四郎右衛門

[右側面]

東いの木戸　道

南よし川

小島惣右衛門
鈴木佐兵衛
百木平　六
富澤半兵衛
鹿倉八十八
見晴直　蔵
内田紋右衛門

元治元甲子年十月

※「いの木戸」とは榎戸（えのきど）のこと。地元では「いのきど」となまって発音していたことがわかる。
※この庚申塔を造立した人々の中で、子孫のわかっている人を参考までにあげると次の通りである。

富沢八右衛門は、増森一六六七の富沢家
関島　平八　は、増森一七八七の関島家
富沢仁右衛門は、増森一七三三の富沢家
林　源太郎　は、増森一七四二の林家
小島　武兵衛　は、増森一七六一の小島家
林　茂右衛門は、増森一七五二の地（現在、理容トヨダ）
黒田　嘉兵衛　は、増森一七六七－二の地
鹿倉四郎右衛門は、増森一七五九の中村家西側の地（現在、畑地）
小島惣右衛門は、増森一七九七の小島家
百木　平　六　は、増森一六四四の百木家
富沢　半兵衛　は、増森一七三五の富沢家
内田紋右衛門は、増森一七八六の内田家

11．聖徳太子像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　祠型（北西向き・高さは高）
年　号　文化四年（一八〇七）

[左側面]

[台　石]

文化四丁卯年
五月廿二日

セハ人

内田忠兵衛
林　又五郎
石井吉左ヱ門
冨沢金　蔵
須賀久　蔵
中村藤左衛門
金子清　蔵
辰沢権兵衛
中村次良兵衛

[正面]
（聖徳太子孝養像）
[右側面]

山崎源次郎
須賀幸　七
前田吉右ヱ門
平林浅右ヱ門
中島久　八
大塚清　吉
内野平五良
会田孫　七
渋谷文右ヱ門

12．道標付き青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一四六番）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　駒型（北西向き・高さは高）
年　号　安永三年（一七七四）
[左側面]
安永三甲午二月吉日　奇進村中
[正面]
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）　右こしかや道
左乃田山さき道
[右側面]

願主
八右衛門
源　七
□　八
久左衛門
平　六
庄左衛門
小平次

※「乃田山さき道」とは、野田（現在の千葉県野田市）の山崎へ通じる道という意味。増森と山崎とは江戸の昔から交流がさかんであった。

13．道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三四番）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　変形角型（北西向き・高さは中）
　　頭部上面が平らな山状様角型
年　号　文化十二年（一八一五）

［左側面］
赤岩わたし道

［正面］
文化十二亥年　講
（梵字ウーン）庚申塔
十月吉祥日　中

林　幸八　小嶋惣右ヱ門
鈴木七兵衛　冨沢吉右ヱ門
百木平　六　内田□右ヱ門
小嶋佐右ヱ門　栗原又四良
冨沢八右ヱ門　関口吉十良
林　源太良　同　定右ヱ門
同　藤右ヱ門　鈴木源兵衛
横川賀右ヱ門　同　佐兵衛
須加数右ヱ門　同　喜平治
中村清兵衛　渡鳥（辺）文左右ヱ門
林　太兵衛　冨沢久右ヱ門
立沢権兵衛　鹿倉清左右ヱ門

［右側面］
榎戸わたしミち

黒田賀兵衛
山崎賀右ヱ門
鈴木政右ヱ門
冨沢仁右ヱ門
林　茂右ヱ門
小嶋善兵衛

［裏面］
越ケ谷
不動道
増森村

※増林92番（寛政年間）や増林88番（文化年間）の石塔に「ばば渡し」と刻まれているのが見られ、これは増林村と上赤岩村をつなぐ渡しのことであるから、赤岩渡しとは増森村と下赤岩村を結ぶ古利根川の「馬渡し」のことをさすと思われる。「馬渡し」（孫七渡し）は、渡し舟による人の往来の他に馬も運んでいたという。
榎戸渡しとは、増森村と川藤村の榎戸を結ぶ古利根川の渡しである。

14．道標付き「不動明王」文字塔（『越谷市金石資料集』不動一三番）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　頭部山状角型（北西向き・高さは高）
年　号　嘉永元年（一八四八）

［左側面］
嘉永元戊申九月吉日
西　こしかや
　　大さかミ不動
東　赤岩わたし
　　のだ　道

［正面］
成田山不動明王

［右側面］
南　よし川　道

［台石］
小嶌金治良
鈴木朝之助
小嶌惣吉
冨澤仁兵ヱ
鹿倉八十八
中村安右ヱ門
林　仙蔵
金子由蔵

増森村
四国
同行

黒田嘉平太
百木伊三良
山嵜勇吉
小嶌平治良
冨澤清兵ヱ
小嶌善蔵
関嶌嘉兵ヱ
中村要吉

（7）増森神社

元は水神社といわれた増森村の鎮守である。

15．道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三五番）
所在地　増森・増森神社
石塔型式　頭部山状角型（南向き・高さは中）
年　号　文化十三年（一八一六）

［左側面］
南　吉川　道

増森村三町野組世話人　中村吉兵衛
　　須賀伝兵衛

[正面]
文化十三丙子年　名倉徳右ヱ門
森田岡右ヱ門
同　藤右ヱ門
(日月)庚申塔　須賀五良兵ヱ
冨沢友七
増田惣左ヱ門
山崎利　助
三月吉祥日　中村吉兵衛
[右側面]
須加太良兵衛
同　孫右ヱ門
内田弥兵衛
北　増　林　道　森田清　蔵
内田忠兵衛
中村庄左ヱ門
金子太良右ヱ門
須加伝兵衛
[裏面]
此方みちなし

※増森二－一九〇〇の須賀傳次氏（昭和五年生まれ）からの聞き取り調査によると、この庚申塔は、もとは増森村三丁野の須賀家（増森二－二〇〇）と中村家（増森二－一九九）の敷地の境界線（かつては小道があった）の辺りにあり、須賀家の敷地にあった当時の大きな柚の木（今はその木の子孫がある）のそばの小道に面して、中村家の方を向いて（南西向き）建っていた。この小道は、昔は北は増林、南は吉川に通じていたのであろう。その後この庚申塔は、須賀傳次氏が小学校二年生の頃（昭和十三年頃）に現在の増森神社に移転されたという。

※須賀傳次氏によると、この庚申塔に刻まれている増森村の「三町野」（三丁野）の地名のいわれは、昔この地域には、初めは三軒しか家がなかったからという。すなわち、名前に「傳」がつく須賀家（増森二－二〇〇）、名前に「庄」がつく中村家（増森二－一九九）、名前に「吉」がつく中村家（増森二－四七）の三軒である。この庚申塔に刻まれた名前の中の須賀伝兵衛、中村庄左ヱ門、中村吉兵衛が、その三軒にあたるのである。

参考までに、この庚申塔を造立した人々の子孫は次の通りである。

「名倉徳右ヱ門」は、増森二－八の名倉家
「森田岡右ヱ門」は、増森二－二九の森田家
「森田藤右ヱ門」は、増森二－三二－一の森田家
「須賀五良兵ヱ」は、増森二－三〇の須賀家
「冨沢　友　七」は、増森二－三四－三の地
現在は小杉精機製作所の地となっている。
「増田惣左ヱ門」は、増森二－四八の増田家
「山崎　利　助」は、増森二－四五の山崎家
「中村　吉兵衛」は、増森二－四七の中村家
「須加太良兵衛」は、増森二－一七三の須賀家
「須賀孫右ヱ門」は、増森二－一六三の須賀家
「内田　弥兵衛」は、増森二－一六〇の内田家
「森田　清　蔵」は、増森二－二〇七の森田家
「内田　忠兵衛」は、増森二－二〇一の内田家
「中村庄左ヱ門」は、増森二－一九九の中村家
「金子太良右ヱ門」は、中村庄左衛門家と内田忠兵衛家の間の地。
「須加　伝兵衛」は、増森二－二〇〇の須賀家

（8）中村家（増森二－四七）路傍

16．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所　在　地　増森・中村家（増森二－四七）路傍
石塔型式　駒型（東向き・高さは中）
年　　号　宝暦四年（一七五四）
[左側面]
増森村
三丁野
□栄

[正面]
宝暦四甲戌天
(日月)庚申供養塔（三猿）
十月吉日

※向かって右隣に祠に入った高さ三十六センチの駒型の「水神天」文字塔が安置されている。昭和九年七月建立の石塔である。

17．「三田八幡宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・中村家（増森二―四七）路傍
石塔型式　祠型（東向き・高さは中）
年　号　天保十二年（一八四一）
［正面］
三田八幡宮
［右側面］
天保十二年丑年
六月廿六日

（9）増森新田の稲荷社

18．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申八四番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　号　享保十八年（一七三三）
［正面］
享保十八丑年
惣左ヱ門
傳右ヱ門
□（増カ）右ヱ門
与右ヱ門
□（増カ）兵衛
次兵衛
伊兵衛
安右ヱ門
（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）
八月吉日

19．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一三八番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　号　明和七年（一七七〇）
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
［右側面］
明和七庚寅三月吉日
嘉右ヱ門　吉兵ヱ　由右ヱ門
与惣右ヱ門　清次郎　源右ヱ門
伊右ヱ門　伝次郎　庄八郎
喜七郎　伝六郎　吉右ヱ門
七郎右ヱ門　彦七郎　佐平治
利右ヱ門　勘兵ヱ　由右ヱ門

20．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申三七番カ）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　号　不詳
［正面］
□
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
九月吉日

※幅が約四十センチである。金石資料集の庚申塔三七番も同じなので、高さ百十センチ、幅四十センチの庚申塔三七番（元禄年間造立）かもしれない。

21．道標付き青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一九二番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　変形駒型（西向き・高さは中）
年　号　寛政十一年（一七九九）
［左側面］
右ましはやし
左こしかや　道
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（三猿）
［右側面］
寛政十一己未四月吉日

※青面金剛の下の左手には、「ショケラ」が描かれていたと思われる。

22．「弁財天」文字塔（『越谷市金石資料集』弁天六番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　駒型（西向き・高さは低）
年　号　天保九年（一八三八）
［左側面］
天保九戌四月吉日
［正面］
辨□□□（財天）

［右側面］
当村
別当　真正寺

※小さな祠の中に安置されている。すぐ近くには真正寺（しんしょうじ、現、増森新田センター）がかってあった。真正寺は弁天社を所有していた。それを物語る石塔といえよう。

23．「第六天」文字塔（『越谷市金石資料集』第六天・一番）
所　在　地　増森・増森新田の稲荷社（増森三一九の松井家より移転）
石塔型式　祠型（南向き・高さは中）
年　　号　宝暦六年（一七五六）
［左側面］
宝暦六丙子暦
正月吉祥日
［正面］
第六天神宮
［右側面］
松井清学院長恵

※小さな祠の中に安置されている。もとは増森三一九の松井家にあった。屋号が『清学院』（清覚院）と呼ばれる松井家は、江戸時代に清学院（せいがくいん）の住職を勤めていた家柄で、第六天社を祭り、また寺子屋も開いていた。右側面に刻まれた松井長恵も寺子屋の師匠として活躍したのであろうか。
明治になると、越ケ谷の久伊豆神社の初代神主を勤めた。敷地内には、初代となった松井雄宣（かつのぶ）氏の墓石がある。そこには、

岡田勢以子　明治四年九月四日歿
前祠掌　松井雄宣之墓　享年四十歳
池田多計子

と刻まれている。雄宣の前妻、後妻ともに名に「子」がついているので、家柄の高い出であったと推定できる。なお松井氏の後を引き継いだ宮司が池田氏のようである。戦後は現在の小林氏となる。
また敷地内には祠があり、不動明王立像、役（えん）の行者（ぎょうじゃ）と赤鬼・青鬼の像、松井雄宣氏の木像、それに中央に「（梵字アー）東照宮大権現家康公」、左右両側に「元和二丙辰」「四月十七日」と刻まれた位牌（裏側には二代から七代までの徳川家将軍の戒名なども刻まれている）が安置されている。赤鬼は前鬼、青鬼は後鬼。
松井雄宣氏の後妻となった池田多計子は、菊の御紋（十六葉八重裏菊）がついたお盆を松井家に嫁ぐ時に持ってきている。
また松井家では、清学院関係の古文書をはじめ多くの古文書を保管している。

（10）増森新田センター（真正寺跡地）

ここは、かつて真正寺があった所である。

24．百八十八箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所　在　地　増森・増森新田センター隣の清水家墓所
石塔型式　頭部山状角型（南向き・高さは中）
年　　号　天明八年（一七八八）
［正面］
（梵字サ）　天明八戊申歳　行者
（梵字キリーク）　奉供養百八十八箇所二世安楽攸
（梵字サク）　六月吉祥日　善観

※『越谷市金石資料集』に掲載の「庚申二一番」「庚申九七番」「真言八番」の石仏石塔や『越谷ふるさと散歩（下）』二一六頁に掲載の明和八年の「六十六部廻国供養塔」の所在が不明である。

（11）吉田家（増森二四八四）路傍

吉田家（増森二四八四）の東側路傍に、昭和八年（一九三三）に遷宮されて祭られている雷電社と古峰神社の二つの祠が並んである。それらの祠の後ろには、「奉納　両社遷宮紀念　氏子中」と刻まれた高さが約百六十六センチの記念碑が建っている。ここは江戸時代に「雷電社」が置かれていた地である。
また祠の前には二基の力石が置かれている。さらに、雷電社の祠のすぐそばには、「雷神宮」と刻まれた石塔がある。